田村　卓也

平成 26 年度　文化科学研究科学生派遣事業　研究成果レポート

１．事業実施の目的：スワヒリ海村における漁撈を中心とした生計維持活動の実態把握

２・実施場所：ケニア共和国ナイロビ市・コースト州クワレ郡ワシニ島

３．実施期日：平成 26 年　6 月 25 日（水）から　7 月 31 日（木）

４．成果報告

●事業の概要

今回は、今後実施予定の長期調査にむけたビザの申請手続きをナイロビ市の入国管理局で行ったのち、調査地であるコースト州クワレ郡のワシニ島において、漁撈をはじめとした島内の生計維持活動に関する概況把握を目的とし、約１ヶ月間の予備的調査を行った。

ワシニ島は、島内の自然環境が農耕に適していないこともあり、島の海岸および周辺海域で行われる漁撈と、島の南方海域に位置する海洋公園を訪れる観光客へのガイドや船の運航といった観光関連の仕事が、島民の現金収入源として大きな位置を占めている。今回の調査期間は、南からの季節風が強く吹くため海が荒れやすく、年間のなかでももっとも漁撈が低調となる時期である。また、観光に関してもオフシーズンである上に、ケニア国内の治安悪化を理由として、欧米諸国が沿岸部地域に対して渡航勧告を発出しており、例年以上に観光客数が減少している。観光ガイドの中には観光の仕事で十分な収入が得られず、漁師とともに漁撈を行うことによって生計を維持している者もみられた。

今回の調査では、まず海産物仲買人の仕事に同行しながら、島で水揚げされた海産物の流通経路に関する調査を行った。ワシニ村には２名の仲買人がおり、彼らは島の西側と南側の水揚げポイントにおいて漁師から魚を買取り、大陸側のシモニにある魚市場に卸したり、島内での販売を行っている。漁師からの買い取りの際には魚の種類や大きさを考慮した上で重さを計り、金額が決定される。買い取り金額は時期によって大きく変動する。漁師は必ずしも毎日仲買人に魚を持っていくのではなく、直接シモニの魚市場に漁獲を運んでいる様子もみられた。また近年、島には不定期に中国人が海産物（魚、フカヒレ、ナマコなど）を買い付けに来ており、ケニア国内のレストランや中国に向けて販売していることが明らかになった。

次に、年間を通して漁撈によって生計を維持している漁師以外の人々が行う漁として、海岸で行われるタコ漁に注目した。タコ漁が行われるのは干潮時であるが、人々は潮の引き具合や天候に応じて、複数のポイントから最適な漁場を選択して漁を行っていることがわかった。漁獲の多くは自家消費されるが、大潮の日に多くの人が集まる島の南側のサンゴ礁では、仲買人が一般の人々からタコを買い付けている様子もみられた。タコ漁以外にも、漁師が村の前の海岸に網を設置した場合などに、漁師以外の人々が漁に参加し、報酬として数匹の魚を受け取っていた。

ワシニ島の人々の生計維持活動は、天候や潮汐、海況といった自然環境の変化だけでなく、遠隔地で起こった社会的な変化や、新たな流通経路の登場といった諸変化に向き合いながら営まれている。こうした変化はある程度事前に予測することが可能な場合と、突発的に発生する場合があるが、人々のこうした変化に対する対応には、それまでの経験のなかで得られた知識や技能が大きな役割を果たしているといえるだろう。

●本事業の実施によって得られた成果

今回の調査において得られたデータは、今後実施予定の本調査における調査対象や方法、場所を検討するにあたり、非常に有益なものとなった。また、調査地が位置するクワレ郡の漁業事務所から今

後の調査に対する協力の約束と、郡内の海産物水揚げに関する統計資料を得ることができた。これらは、今後博士論文執筆に向けた調査・分析を進めるにあたり不可欠なものであり、今回の調査によって得られた成果は大きい。

●本事業について

博士論文執筆のためには、現地での調査によって得られるデータが欠かせない。しかしながら、調査地が遠隔地である場合、その旅費の負担は非常に大きい。本事業は学生の研究活動を進捗させるために、非常に有益なものであると思う。